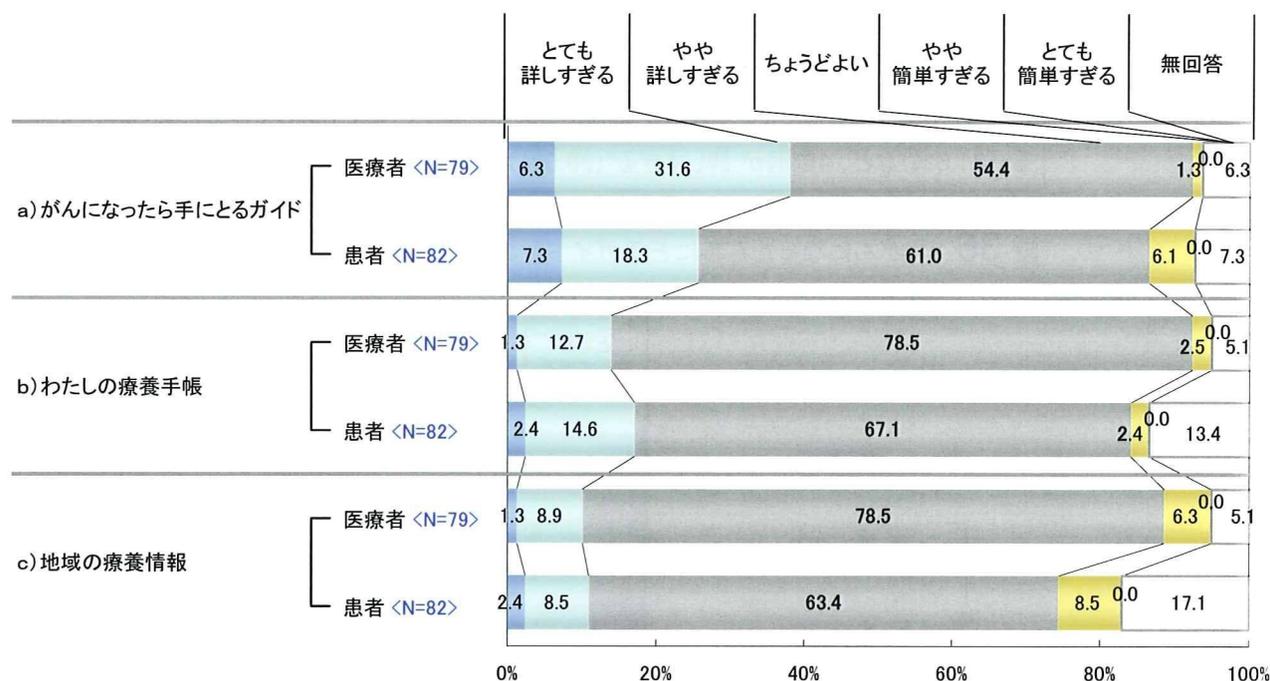


図 35. 『患者必携』の内容は詳しくすぎるか、簡単すぎるか（患者調査結果との比較：3冊子）



■【患者調査】の結果と比較すると、患者調査でも「ちょうどよい」という評価が高くなっていたが、その割合をみると、

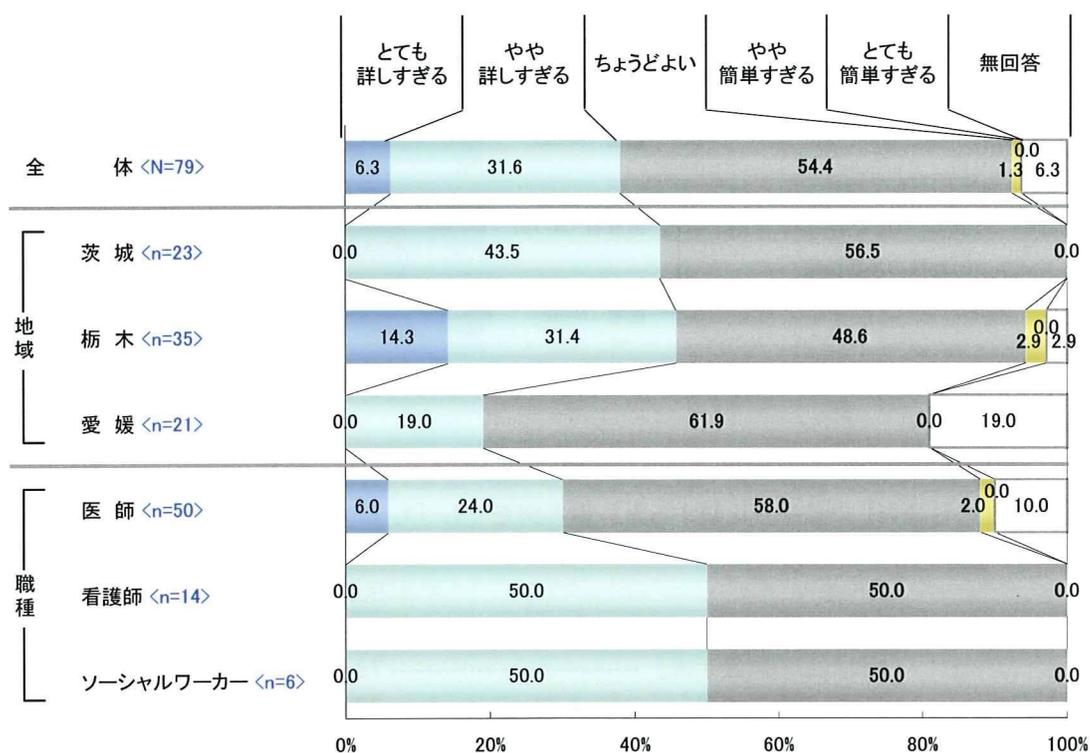
	< a.医療者 >	< b.患者 >	< 差 (a - b) >
『がんになったら手にとるガイド』	54.4%	61.0%	- 6.6%
『わたしの療養手帳』	78.5%	67.1%	+11.4%
『地域の療養情報』	78.5%	63.4%	+15.1%

となっており、『がんになったら手にとるガイド』は医療者より患者の評価の方が高めだが、『わたしの療養手帳』『地域の療養情報』の2つに関しては患者より医療者の方が評価は一層高くなっている。

2-1. 『がんになったら手にとるガイド』の内容は詳しすぎるか、簡単すぎるか

「ちょうどよい」(54.4%)という人が半数強を占めているが、「とても詳しすぎる」(6.3%)、「やや詳しすぎる」(31.6%)など、4割弱が“詳しすぎる”(38.0%)と評価している。

図 36. 『がんになったら手にとるガイド』の内容は詳しすぎるか、簡単すぎるか



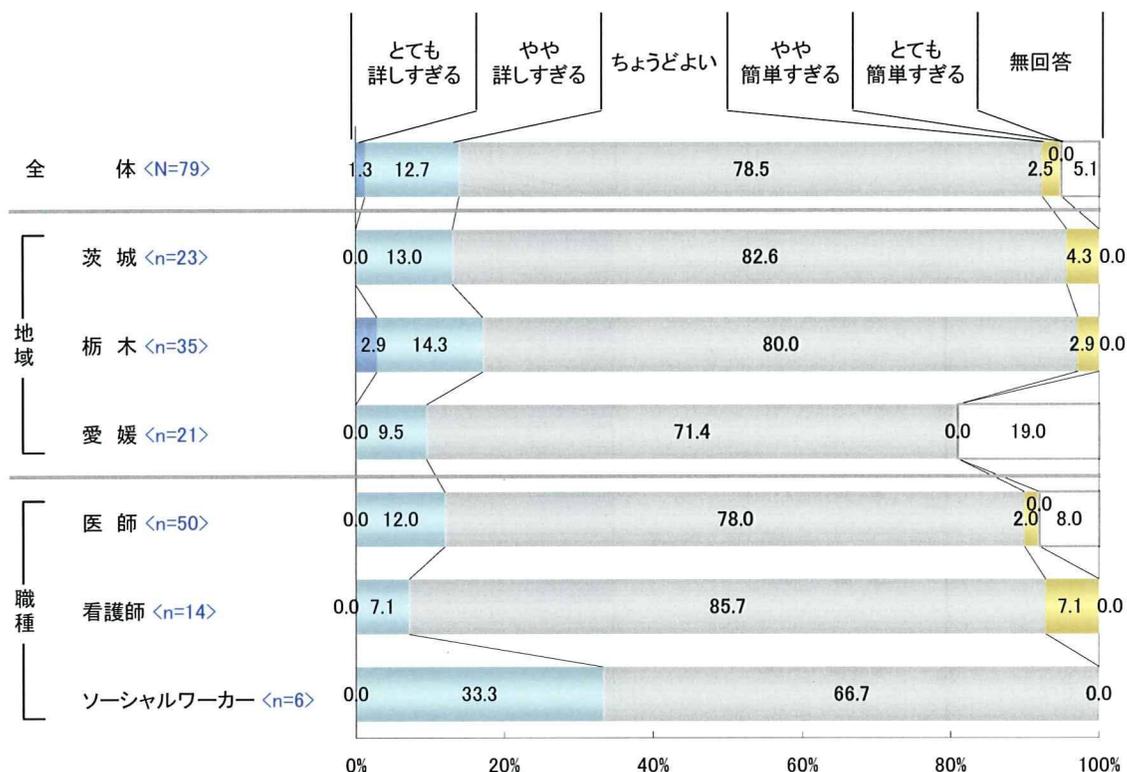
地域別にみると、「ちょうどよい」という割合は《愛媛》(61.9%)が最も高く、以下《茨城》(56.5%)、《栃木》(48.6%)の順となっている。しかし、《栃木》、《茨城》では、4割台の人が“詳しすぎる”(順に45.7%、43.5%)と評価している。

職種別にみると、「ちょうどよい」という割合は《医師》(58.0%)が最も高いが3割が“詳しすぎる”(30.0%)と評価している。なお、《看護師》、《ソーシャルワーカー》では「ちょうどよい」と“詳しすぎる”に評価が二分されている。

2-2. 『わたしの療養手帳』の内容は詳しすぎるか、簡単すぎるか

「ちょうどよい」(78.5%)という人が8割弱を占め、評価はかなり高い。

図 37. 『わたしの療養手帳』の内容は詳しすぎるか、簡単すぎるか



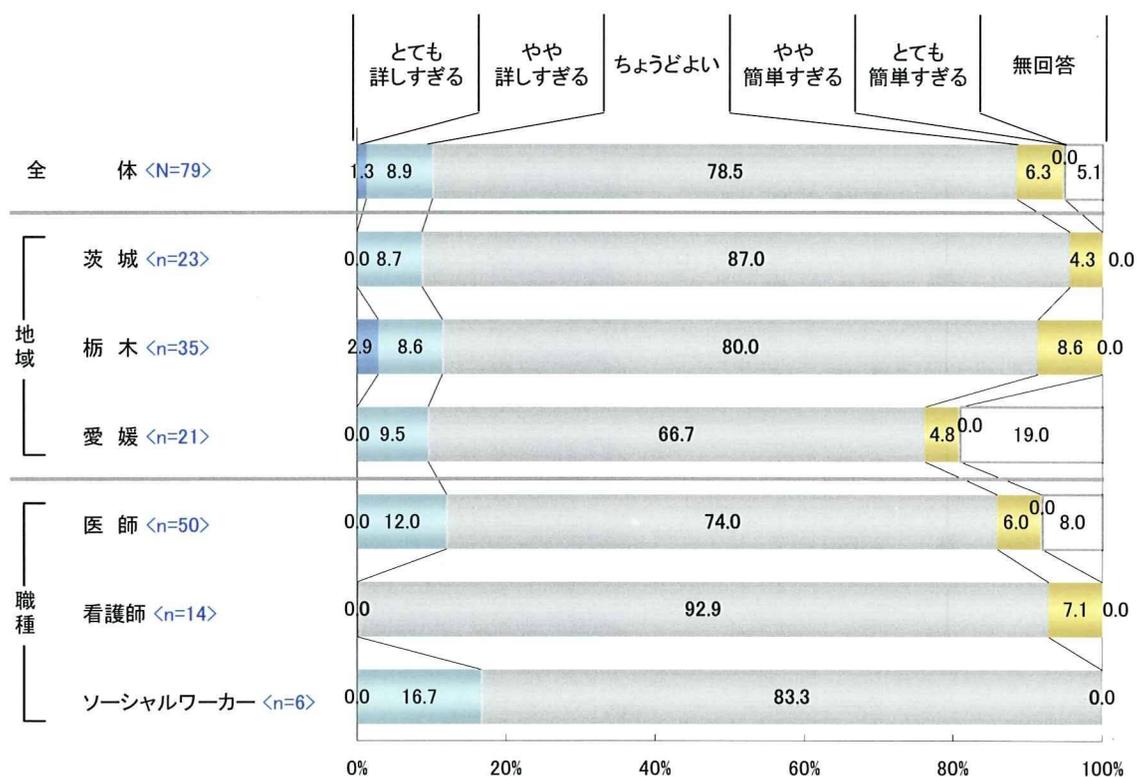
地域別にみると、「ちょうどよい」という割合は、《茨城》(82.6%)、《栃木》(80.0%)に比べて《愛媛》(71.4%)は若干低くなっているが、いずれも7割以上と評価は高い。

職種別にみると、「ちょうどよい」という割合は《医師》(78.0%)より《看護師》(85.7%)の方が高めである。《ソーシャルワーカー》は「ちょうどよい」(66.7%)が3人に2人の割合だが、「詳しすぎる」(33.3%)との評価が目立つ。

2-3. 『地域の療養情報』の内容は詳しすぎるか、簡単すぎるか

前項の『わたしの療養手帳』同様、「ちょうどよい」(78.5%)という人が8割弱を占め、評価はかなり高い。

図 38. 『地域の療養情報』の内容は詳しすぎるか、簡単すぎるか



地域別にみると、「ちょうどよい」という割合は、《茨城》(87.0%)、《栃木》(80.0%)に比べて《愛媛》(66.7%)は若干低くなっているが、いずれも過半数を占めている。

職種別にみると、「ちょうどよい」という割合は《看護師》(92.9%)が最も高く、次いで《ソーシャルワーカー》(83.3%)、《医師》(74.0%)の順となっている。

3. 『患者必携』を患者が手にすることは、医療者にとって役に立つと思うか

「とても役に立った」、あるいは「まあ役に立った」を合わせた“役に立った”割合は、
 a)『がんになったら手にとるガイド』----- 72.2%（「とても役に立った」25.3%）
 b)『わたしの療養手帳』----- 65.8%（「とても役に立った」19.0%）
 c)『地域の療養情報』----- 70.9%（「とても役に立った」21.5%）
 となっており、医療者の多くは、『患者必携』を患者に配布することは医療者にとっても“役に立った”と評価している。

図 39. 『患者必携』を患者が手にすることは、医療者にとって役に立つと思うか（3冊子）

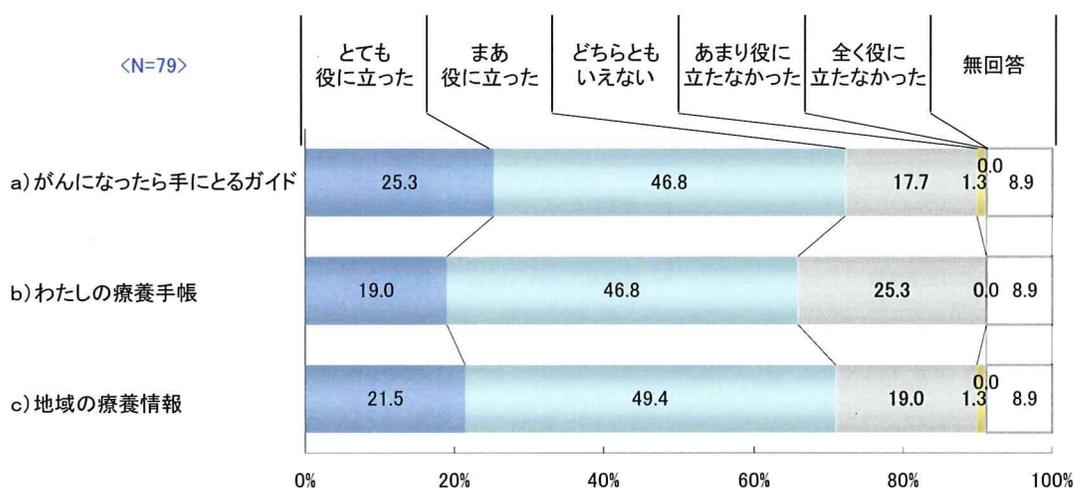
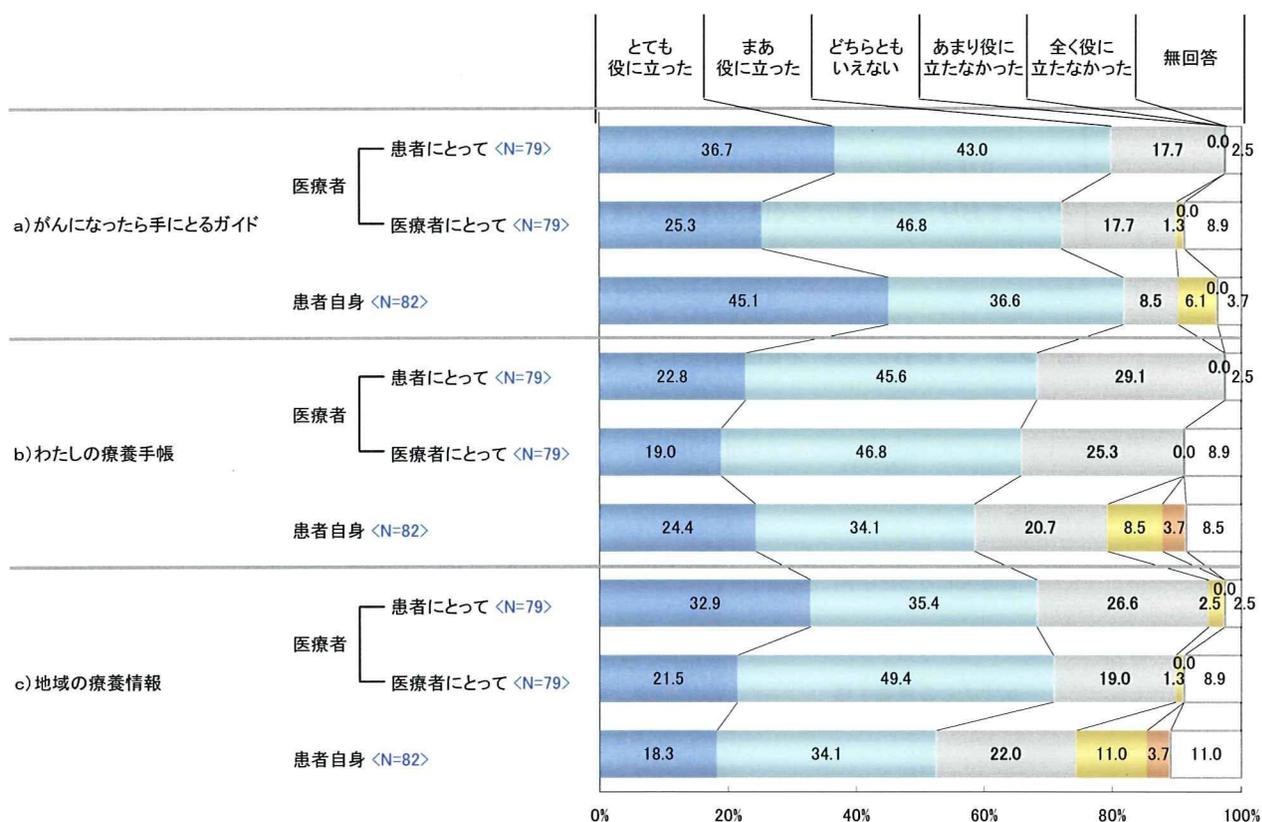


図 40. 『患者必携』は、医療者にとって役に立つと思うか（患者調査結果との比較：3冊子）



- 医療者は、自分自身にとっても「患者必携」は“役に立った”という評価が圧倒的だったが、前述のように、患者にとっても“役に立った”とみている。
- また、【患者調査】から患者自身の“役に立った”割合と比較すると、『がんになったら手にとるガイド』についてはともに8割前後で同程度だが、『わたしの療養手帳』『地域の療養情報』については患者自身（各5割台）より医療者（各7割弱）の方が高くなっている。

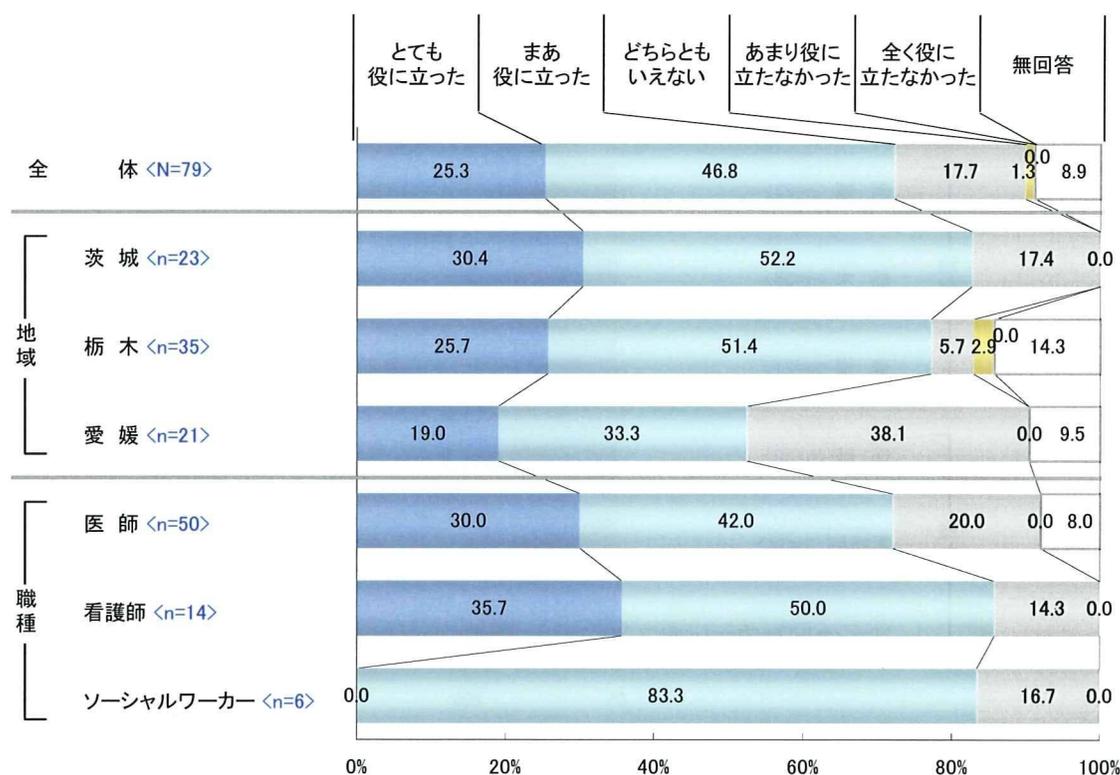
表 2. “役に立った”割合

	【医療者】		【患者自身】
	患者にとって	医療者にとって	
『がんになったら手にとるガイド』	79.7%	72.2%	81.7%
『わたしの療養手帳』	68.4%	65.8%	58.5%
『地域の療養情報』	68.4%	70.9%	52.4%

3-1. 『がんになったら手にとるガイド』は、医療者にとって役に立つと思うか

「とても役に立った」(25.3%)、あるいは「まあ役に立った」(46.8%)を合わせた“役に立った”(72.2%)という人が7割強を占める。

図 41. 『がんになったら手にとるガイド』は、医療者にとって役に立つと思うか



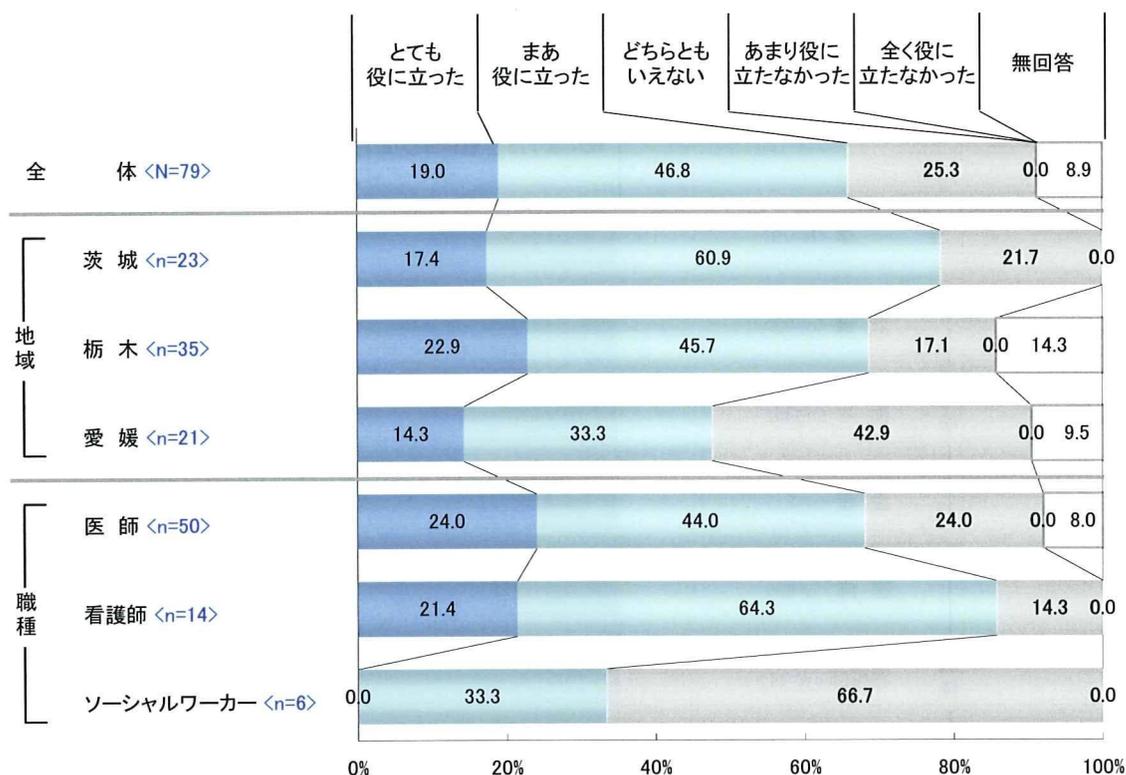
地域別にみると、《愛媛》では“役に立った”(52.4%)という割合が5割を超えているが、《茨城》(82.6%)、《栃木》(77.1%)に比べてかなり低いのが目につく。

職種別にみると、“役に立った”という割合は《看護師》(85.7%)、《ソーシャルワーカー》(83.3%)に比べて、《医師》(72.0%)は低くなっているが、いずれも7割以上を示し、評価は高い。

3-2. 『わたしの療養手帳』は、医療者にとって役に立つと思うか

「とても役に立った」(19.0%)、「まあ役に立った」(46.8%)を合わせた“役に立った”(65.8%)という割合は、3冊子中、最も低い。

図 42. 『わたしの療養手帳』は、医療者にとって役に立つと思うか



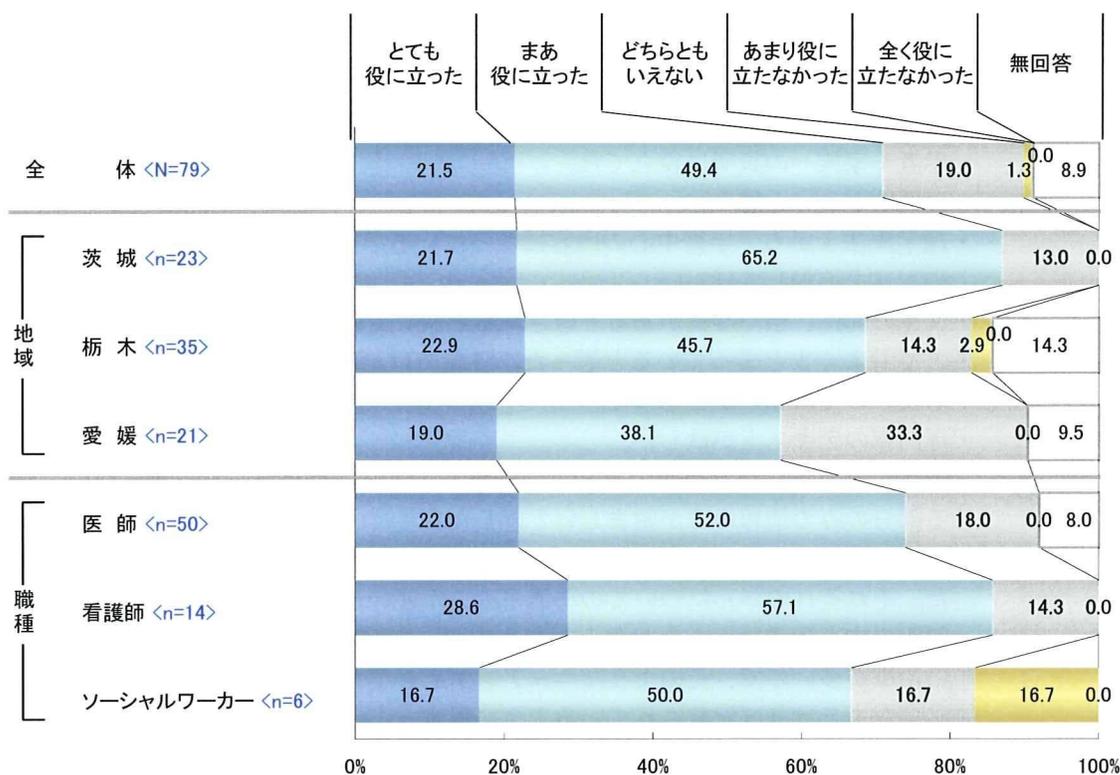
地域別にみると、《愛媛》では“役に立った”(47.6%)という割合が半数を割っているのが目につく。他の地域は、《茨城》(78.3%)、《栃木》(68.6%)と、いずれも過半数を占め、評価は高い。

職種別にみると、“役に立った”という割合は《看護師》(85.7%)が最も高く、次いで《医師》(68.0%)が続く、《ソーシャルワーカー》は3割強(33.3%)と、低い評価であった。

3-3. 『地域の療養情報』は、医療者にとって役に立つと思うか

「とても役に立った」(21.5%)は2割強にとどまっているが、「まあ役に立った」(49.4%)が半数近く、合わせて7割の人が“役に立った”(70.9%)と評価している。

図 43. 『地域の療養情報』は、医療者にとって役に立つと思うか



地域別にみると、“役に立った”という割合は、《茨城》(87.0%)が最も高く、次いで《栃木》(68.6%)、《愛媛》(57.1%)の順となっているが、いずれも過半数を占め、評価は高い。
 職種別にみると、“役に立った”という割合は《看護師》(85.7%)が最も高く、次いで《医師》(74.0%)、《ソーシャルワーカー》(66.7%)の順となっている。

4. 『患者必携』に加えた方がよいと思う情報【自由回答抜粋】

a) がんになったら手にとるガイド

- ・外来待合室や病棟に置いて、多くの人に見てもらえるようにしている。薬物療法で効果がなかった際の対処法についての記述がない。「もう薬がありません」ではなく、精神的なフォローが必要だと思う。代替療法などの詳しい記述が欲しい。
- ・がん医療のトピックスと同じように、専門用語（治療、検査、病名、医学用語）の解説のページを加える。
- ・疾患の特色として、化学療法・長期入院となるため、経済的な問題について入院早期に対応している。冊子にも経済面での対策が書かれており、役に立った。冊子をコピーして、患者や家族への説明に役立てた。
- ・専門別が良いと思う。
- ・理学療法士から、手術中心の内容になっているとの意見があった。化学療法や放射線治療の記述を追加してほしい。
- ・文章の間に、絵や写真があると癒されると話している患者がいた。
- ・とてもよくまとまっていると思った。各論では治療成績・予後についての数字を記載しても良いのではないかと思った。
- ・専門家のテキストが欲しい。
- ・患者にとって、がんに関する全ての情報が必要とは思わないし、思えない。必要と思われる部分のみの情報の方が望ましいと感じた。
- ・全てのがんについて記載されているが、結果として全体のボリュームが大きすぎると思った。それぞれのがんについての小冊子の方が使いやすいと思う。
- ・説明の中心は進行がんを対象としたもので、内容がかなり重症は印象だった。後遺症のない治療が多いので、そのようなニュアンスも必要だと思った。
- ・必要なことはほぼ記載されているように思う。
- ・図をもう少し大きくしても良いと思う。
- ・食べ物に関する質問が多いので、もう少し食べ物についての説明を増やすと良いかもしれない。
- ・内容が多すぎて、読むのに時間がかかってしまい疲れた。もっとコンパクトにできないか。

b) わたしの療養手帳

- ・このままで良いが、この詳しい手帳を使いきる人がどのくらいいるのか疑問。
- ・記入方法や使用方法をまとめ、記入するページと分けてある方が、後から見やすいように感じる。
- ・サイドにインデックスがあると良いと思った。
- ・終末期には家族の想いで延命をすることがある。本人の意志をきちんと手帳に記しておくことも必要だと思う。
- ・療養手帳こそ、少し大きめのサイズにした方が良いように思う。
- ・乳ガンの「私のカルテ」のように、疾患の部位によっては、それ専用の手帳があり、やはりそちらの方が書きやすいとの意見があった。しかし、疾患を問わず記入するものとしては、今の内容で良いと思う。
- ・分かりやすいと思うが、がん治療は各分野で相当違いがあるので、一冊で済ませるのは無理があるようにも思った。
- ・患者自身が記入する内容としては多すぎる印象がある。疾患別にパンフレットを用意し、

- おおよその項目はあらかじめ記載しておく方が良いと思う。
- ・患者が持つ物なので、もう少しカラフルでも良いと思う。
 - ・自由形式の記入事項が多すぎる。

c) 地域の療養情報

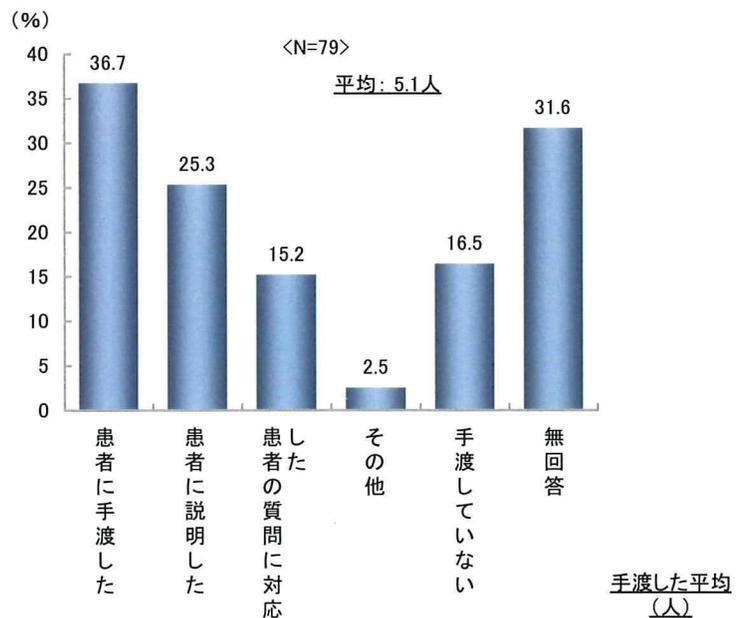
- ・各病院の特徴（設備、治療など）を加える。
- ・情報としては今のままで良いと思う。だが、活用している人はあまりいないようだった。
- ・患者の声を反映して再検討してほしい。
- ・栃木県のがん診療連携拠点病院の施設概要の項で、「他施設のがん患者でも対応可能な専門外来」とあるが、もう少し詳細な情報が必要だと思った。
- ・このような地域ごとの情報提供はあまりなかったので、有用だと思った。
- ・「介護についての相談」のところで、がん患者が利用できる条件などを付け加える。
- ・在宅療養支援診療所、セカンドオピニオン外来実施医療機関について載せてほしい。
- ・少し細かすぎるので、図を多くして詳しくしてほしい。

1. 『患者必携』配布における役割

「患者に手渡した」(36.7%)と最も多く、以下「患者に説明した」(25.3%)、「患者の質問に対応した」(15.2%)となっており、「無回答」が3割強(31.6%)と多いが、“患者必携を手渡した・説明・質問に対応した”人が半数強(51.9%)を占めている。しかし、「手渡していない」(16.5%)という人も少なからずみられた。

- なお、患者に手渡したなど、それぞれの平均をみると、
 - 「患者に手渡した」-----「平均 5.1 人」
 - 「患者に説明した」-----「平均 10.0 件」
 - 「患者の質問に対応した」-----「平均 12.8 件」
 となっている。

図 44. 『患者必携』配布における役割（複数回答）



地域	手渡した平均 (人)						
	茨城 <n=23>	栃木 <n=35>	愛媛 <n=21>	医師 <n=50>	看護師 <n=14>	ソーシャルワーカー <n=6>	その他
茨城 <n=23>	17.4	17.4	34.8	-	8.7	39.1	8.0
栃木 <n=35>	34.3	40.0	11.4	5.7	14.3	40.0	5.8
愛媛 <n=21>	61.9	9.5	-	-	28.6	9.5	3.5
医師 <n=50>	46.0	26.0	6.0	-	22.0	22.0	4.1
看護師 <n=14>	7.1	14.3	50.0	7.1	7.1	35.7	8.0
ソーシャルワーカー <n=6>	33.3	33.3	-	-	16.7	50.0	9.5

地域別にみると、《茨城》は「患者の質問に対応した」(34.8%)が、《栃木》は「患者に説明した」(40.0%)、「患者に手渡した」(34.3%)が、《愛媛》では「患者に手渡した」(61.9%)が主になっている。“患者必携を手渡した・説明・質問に対応した”割合は、《愛媛》(61.9%)が最も高く、次いで《茨城》(52.2%)、《栃木》(45.7%)は半数を割っている。ただし、《茨城》と《栃木》では「無回答」が、それぞれ4割前後と多い。

職種別にみると、《医師》は「患者に手渡した」(46.0%)、「患者に説明した」(26.0%)が、《看護師》は「患者の質問に対応した」(50.0%)が主になっている。

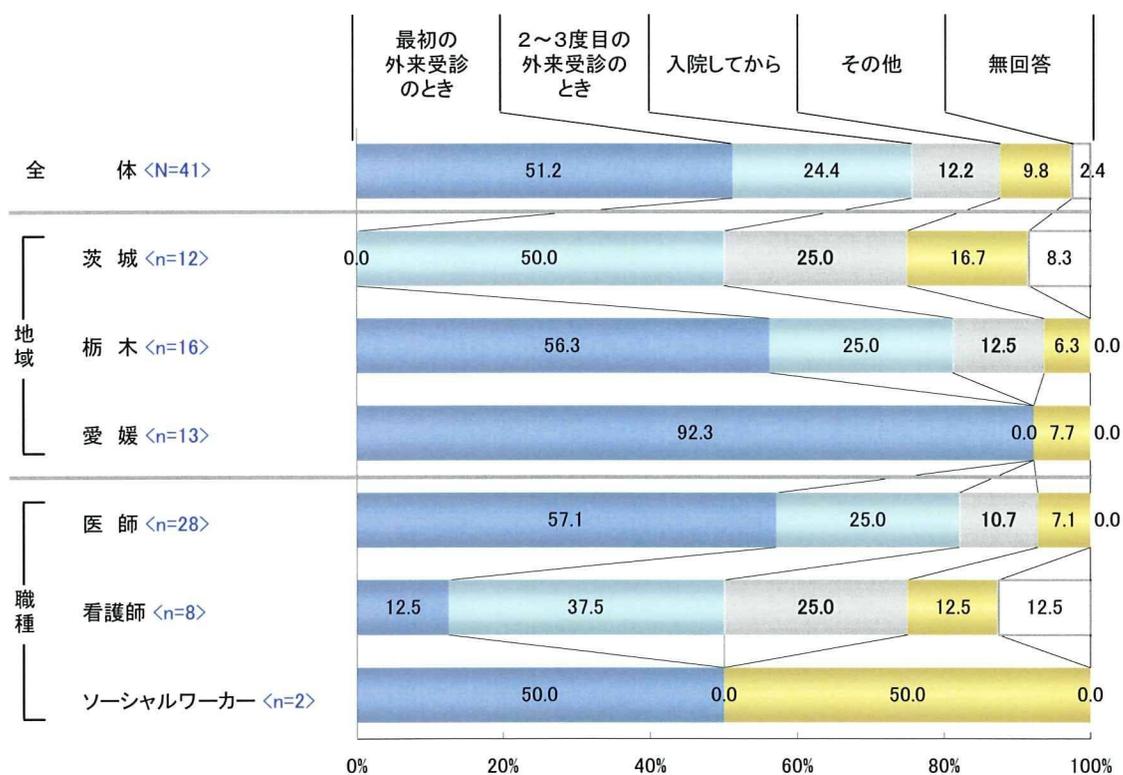
また、“患者必携を手渡した・説明・質問に対応した”割合をみると、《医師》(56.0%)と《看護師》(57.1%)は同程度だが、《ソーシャルワーカー》は3割強(33.3%)にとどまっている。なお、《ソーシャルワーカー》では「無回答」(50.0%)が半数を占めている。

2. 「患者必携」を患者に手渡した時期

“患者必携を手渡した・説明・質問に対応した”人(41名)に、「患者必携」を患者に手渡した時期はいつか聞いてみたところ、「最初の外来受診のとき」が51.2%と最も多く、次いで「2～3度目の外来受診のとき」(24.4%)となっており、「外来受診のとき」に手渡した人が75.6%と4人に3人の割合となっている。なお、「入院してから」という人も1割強(12.2%)みられる。

●【患者調査】で患者自身が「患者必携」を受けとった時期をみると、“外来受診のとき”が73.2%と同程度であった。

図 45. 『患者必携』を患者に手渡した時期



地域別にみると、《茨城》では「2～3度目の外来受診のとき」(50.0%)と「入院してから」(25.0%)が主になっているが、《栃木》は「最初の外来受診のとき」(56.3%)、「2～3度目の外来受診のとき」(25.0%)など“外来受診のとき”が8割強(81.3%)、《愛媛》も“外来受診のとき”(「最初の外来受診のとき」)が9割強(92.3%)を示している。

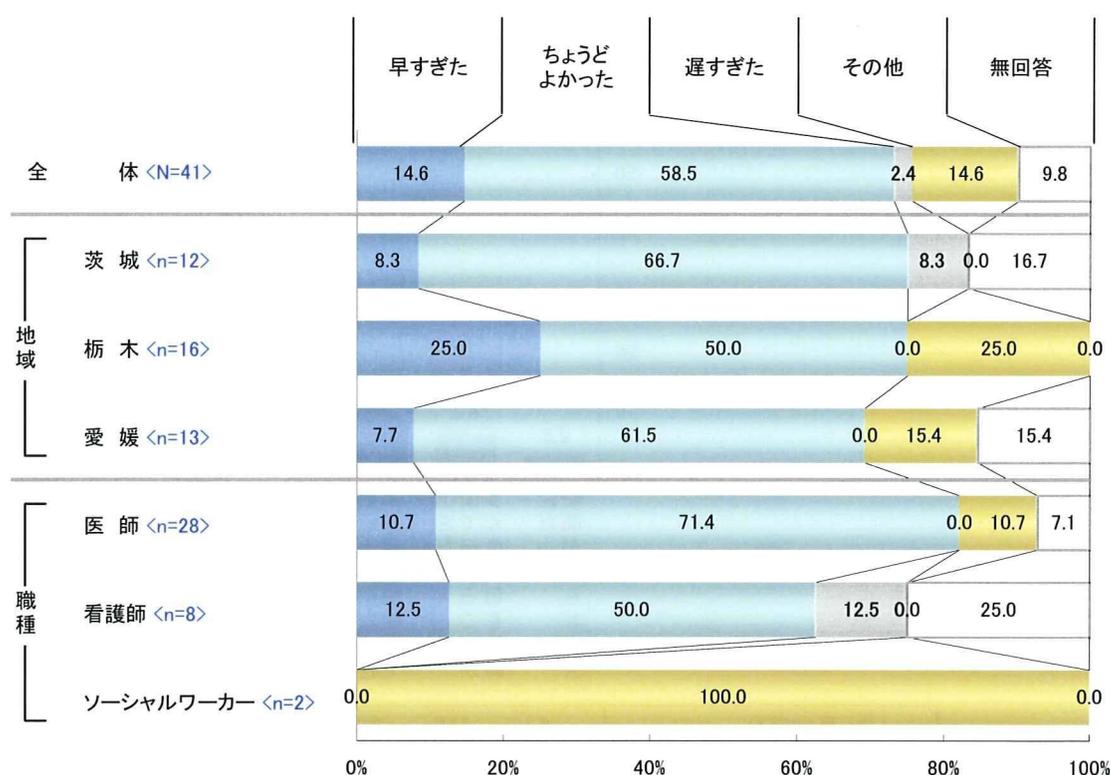
職種別にみると、《医師》は「最初の外来受診のとき」(57.1%)、「2～3度目の外来受診のとき」(25.0%)など“外来受診のとき”が8割強(82.1%)を占めている。《看護師》は“外来受診のとき”(50.0%)が5割を占め、「入院してから」(25.0%)は《医師》(10.7%)より多くなっている。

3. 『患者必携』を手渡した時期は適切だったか

「ちょうどよかった」が6割弱(58.5%)と、適切だったという評価が高い。一方、「早すぎた」(14.6%)、あるいは「遅すぎた」(2.4%)という人もみられた。

●【患者調査】でも「ちょうどよかった」(67.1%)という評価である。

図 46. 手渡した時期は適切だったか

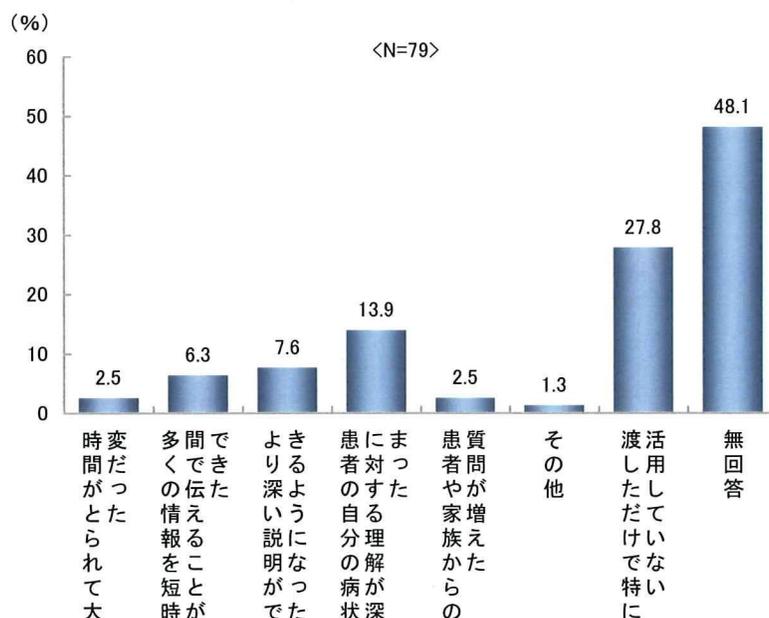


地域別にみると、「ちょうどよかった」という割合は《茨城》(66.7%)と《愛媛》(61.5%)では6割台だが、《栃木》(50.0%)は若干低く、「早すぎた」(25.0%)という評価が目につく。職種別にみると、「ちょうどよかった」という割合は《医師》(71.4%)の方が《看護師》(50.0%)より20ポイント以上高くなっている。

4. 『患者必携』を渡したり、活用してみた感想

「無回答」(48.1%)が非常に多いが、『患者必携』を渡したり、活用してみた感想をみると、「患者の自分の病状に対する理解が深まった」(13.9%)が最も多く、以下「より深い説明ができるようになった」(7.6%)、「多くの情報を短時間で伝えることができた」(6.3%)が続いている。しかし、「渡しただけで特に活用していない」という人も3割弱(27.8%)と相当数いる。

図 47. 『患者必携』を渡したり、活用してみた感想（複数回答）



地域	茨城 <n=23>	4.3	13.0	21.7	26.1	4.3	-	4.3	47.8
栃木 <n=35>	2.9	2.9	2.9	14.3	2.9	2.9	25.7	54.3	
愛媛 <n=21>	-	4.8	-	-	-	-	57.1	38.1	
職種	医師 <n=50>	2.0	4.0	2.0	14.0	2.0	-	38.0	44.0
看護師 <n=14>	-	14.3	28.6	21.4	-	-	7.1	42.9	
ソーシャルワーカー <n=6>	-	-	-	-	-	-	33.3	66.7	

「渡しただけで特に活用していない」という人が《愛媛》で6割弱(57.1%)、職種別にみて、《医師》が4割弱(38.0%)であった。

5. 『患者必携』を患者に配布して、よかったこと、大変だったこと、今後の活用についての意見【自由回答一覧】

- ・現在、外来勤務をしているが、勤務中に患者や家族から電話での相談が入ることが少なくない。勤務の合間を使って対応しているため、限られた時間で多くの情報を分かりやすく伝えることが必要になってくる。今回、“がんになったら手にとるガイド”を読むことにより、いろいろな情報を知ることができたので、今後の対応に役立てていけると考えている。
- ・内容について事細かに聞かれることはなかったが、入院中の患者がよく読んでいた。
- ・冊子を読んだ患者や家族からの、新たな質問に対する説明をする時間が必要になった。
- ・患者自身が自己の身体や病気を見つめるのに役立つと思った。患者意識を持って治療に臨め、継続するためにも有効だと思う。
- ・入院して、まず治療費など経済面の不安を持つ人が多いので、公的助成・支援の項目は大変役立つと思う。医療用語が多く、高齢の患者には少し難しいように思った。
- ・実際に患者には配布したことがないが、これらの冊子から多くの情報を得ることができ、患者や家族の役に立つ内容になっていると思った。
- ・2冊しかなかったため、配布せずに、必要な部分のみコピーして情報提供時に使用した。「がん」と告知されて、何から整理すれば良いか混乱している時、指針となる本だと思う。冊数が多ければ、院内図書として患者が手に取れるようにしたい。
- ・「がんになったら手にとるガイド」「地域の療養情報」は紙ベースよりもWEBインフォメーションが望ましい。WEB紹介をパンフレットで行えば、コストも少なく済むと思う。
- ・患者と家族の疾病理解に役立つと思う。
- ・全ての患者に渡すことは難しいし、無駄なように感じる。やはり、必要な人に渡していくべきだと思う。また、内容についても量が多く、すべてを説明するには時間がかかるため、理学療法士から苦情もあった。良かったことは、冊子を介して相談ができたこと。相談に来ない患者も、支援センターに寄ってもらえるかもしれないので、そういった意味での効果は大きいと思う。
- ・冊子をきっかけに、何度か患者と話をしていたので、「初めて入院するのに、知った顔がいて良かった」「相談できる場所があると分かって安心した」と言ってもらえた。診察の最後に相談室に寄って、辛い気持ちを少しは吐き出して自宅に帰ったのではないかなと思うので、配布の流れは良かったと思う。治療の内容を聞いても、一度では理解できないことも多いので、ガイドを読んで理解を深めた患者がいた。「医師の説明していた内容がきちんと載っていた」「医師が作成しているので安心」との意見もあった。ガイドの名前に「がん」と書かれているので、配布する方法や時期について検討が必要だと思う。告知された当日に渡すこともあり、残酷だった。人によっては副作用や気持ちの辛さがあつたり、手術後の状態が悪かつたりしたので、再度、面接する適切な時期を見分けるのが大変だった。冊子を渡されても読まない人もいたので、どこへ行けば情報を得られるかは伝えるべきだと思うが、患者が希望していない段階でガイドを渡すのは意味がないと思う。高額医療の説明が難しく、ある程度、熟知している人でも分かりにくいようだった。患者にとっては、どの治療にどのくらいの費用がかかるのか、一概に言えないにしても、大まかな目安が知りたい。
- ・必携が必要な人に渡るように、渡す時期やダイジェスト版の活用など、検討が必要だと思う。書くことや、読むことが苦手な人へのアプローチは難しい。活用の仕方に個人差が大きい。
- ・せっかく作成した必携だが、渡された全ての患者が活用しているわけではない。冊子の存

- 在を知らせるチラシを作成、配布し、冊子が欲しい人に渡した方が良いのではないか。
- ・「気持ちに余裕がないときには、冊子を手にとることができなかった」との意見が多く聞かれた。がんと説明された日に、全ての資料を配付することは、患者・家族にとって辛い。はじめは、心の動揺の手助けになる部分（ガイドの最初の部分）だけで良く、段階的に各疾患ごとに冊子を配布するようにしたい。全てのがんについて記載してあると、不安・恐怖心を増すことがあり、辛くなってしまうようだった。また、患者や家族は主治医の一言を待っているの、主治医が冊子を読むように話してほしい。患者・家族の受け止め方は、病名・再発・転移などにより、とても違いがあるので、個々に合わせての配布が必要である。主治医と話ができる外来とサポート体制を築きあげていくことが大切だと思う。
 - ・今回の冊子を渡したことで、相談支援センターを知ってもらえきっかけになった。そのおかげで、不安や疑問を打ち明ける場として相談支援センターを活用してもらえたことは良かったと思う。ただ、相談内容は冊子の内容に触れるものより、治療や病気に対しての不安だったり、近況報告が多かったように思う。そして、多くの人から、「冊子を見る気持ちの余裕はなかった」「見る気持ちにはなれなかった」との意見が聞かれた。その原因のひとつには、冊子を渡す時期があったのかもしれない。多くの患者は告知直後に渡され、中には突きつけられる思いになった人もいたようだった。情報を知りたいと思う時期は一人一人違うだろうし、情報を受け止められるタイミングも一人一人違うと思う。冊子を渡すのは、病気や病状をある程度受け止めることができた段階が良いと思う。また、一つの冊子にまとめるのではなく、治療段階や病気ごとの小冊子にし、必要な情報を渡した方が良いようにも感じた。
 - ・あまり直接患者の反応を見る機会がなかった。患者がどのような反応を示したのかについては興味がある。おそらく、かなり役に立つとは思うのだが…。
 - ・がんの診断がついてから渡すということだったが、初診時から患者は知りたいことがたくさんある。配布できるようになったら、初診時からどんどん渡して活用したいと思う。
 - ・相談員にしっかり説明してもらえて良かった。医師自身が外来中に説明を行うのは無理だと考えている。また、患者は病気のことで精一杯で、読んだり書いたりすることまで思いが届かない人の方が多いような気がした。すぐに断った患者も何人かいた。
 - ・「がんになったら手にとるガイド」は内容が盛りだくさんで、目を通すのが大変と感じられた。もう少し簡略化するのが良いと思った。患者からも「読むのが大変だった」と聞いている。
 - ・将来、コミュニケーションツールになれば良いと思う。理学療法士の自主性が深まる社会になってほしい。
 - ・「がんになったら手にとるガイド」は、詳しくかみ砕いて記述されていると思った。医師は第3部以降の内容は詳しくても、第1、2部は忘れがちのように思う。第1、2部は、一度医師が目を通す価値があると感じた。インターネットのHP同様、メンテナンス（更新）や改訂がその都度必要だと思った。「わたしの療養手帳」は、医療関係者から見てもよくできていると思った。患者からの質問や手帳の不完全なところを手伝いやすいと思った。一方で、ここまでの内容を患者がまとめるのはハードルが高く、多くの時間や人手（相談支援センターや説明する医師）の確保が心配になった。情報過多や誤った情報への対策は、薬にもすがりたい気持ちの患者に取捨選択は難しいと思う反面、自分で情報の正しさを判断できる力をつけてほしいと思っている。
 - ・医学関係者には便利だが、このようなガイドを作ることは大きな無駄だと思う。第1～3部はもっと簡潔にした方が良い。第4部は全てのがんを記載しているが、分冊で十分だと思う。また、患者にとって極めて不十分な内容だと思う。
 - ・患者に配布して、特にその後患者からの意見はなかった。配布しやすかったの、今後患者の意見を聞いて改良を加えていくのが良いと思う。

- ・地域連携パスとの組み合わせ。
- ・重くて大きい。もう少しコンパクトにできないか。

10-7.医療関係者対象調査（静岡県立静岡がんセンター）

薬局：「患者必携」に対する評価

1. 「患者必携」は患者にとって役に立ったと思うか

「とても役に立った」、「まあ役に立った」を合わせた“役に立った”割合は

a)『がんになったら手にとるガイド』----- 100.0%

b)『わたしの療養手帳』-----88.9%

c)『地域の療養情報』----- 100.0%

となっており、いずれも高率で、“役に立たなかった”は皆無である。

図 48. 「患者必携」は役に立ったと思うか

